記念講演
後藤新平と拓殖大学－自治三訣によせて（下）
総長・学長　渡辺　利夫

さて、話は尽きません。あれほどの巨大な仕事群を成し遂げた後藤を衝き動かしてきた思想とは何かについて、ここで考えてみなければなりません。

後藤の融通無碍な働きを反映してのことでありましょう、氏の思想は首尾一貫したものは必ずしもありません。時に矛盾もみられるのですが、大きくいって1つの体系性をもっていると思われます。思い切って単純化すればその体系のエッセンスが、晩年、ボーイスカウトに集う青少年に説きつづけた、「後藤三訣」だといっていいと思われます。本学の学友であれば、誰でも知っているはずの次のフレーズ（④）です。

④●人のおせわにならぬやう
人の御世話をするやう
そしてむくいをもとめぬやう
（後藤新平『自治三訣－処世の心得』）

後藤の思想の根幹にあるのは、現代の政治学の用語法でいえば、いわば「国家有機体論」でありまして、「国家契約論」とは対照的なものです。国家有機体説とは何かといいますと、国家を一つの生物のような自然生命体と見立てて、その成員であるところの個人、つまり国民はあたかもそれが一つ一つの細胞であるがごとき有機体の構成者だと考える思想のことだといっていいと思われます。個人あるいは市民との法的な契約によって国家が成り立つ、そう考える国家契約説とはきわだって対照的な思想です。後藤は大正8年（1919）に出版した『自治生活の新精神』（新時代社）という本の中で次（⑤）のようにいっております。

⑤●「もし、国家と国民との関係を、有機体と細胞との関係に比べれば、国家生活の総体は、有機体の機能であり、各種生活体の働きは細胞の働きと同様である。すなわち、各種生活は、国家生活の一部機能であり、国家は生活体機能の働きによって、はじめて国家の働きを全うするのである。したがって、国家の健全な発達をさせようとするならば、国家生活の一部の機能である、各種生活体を健全に発展させねばならない。各種生活体を健全に発展させようとするならば、各種生活体に特有の、特殊な目的、特殊な利害、特殊な習慣、特殊な感情に順応した、生活態様、生活作用が行われなければならない」（後藤新平『後藤新平とは何か－自治』藤原書店、平成21年）

文字通りの「国家有機体説」です。さて、後藤の自治三訣でありますが後藤は第一訣「人のおせわにならぬやう」を「自主的自立」といい、第二訣「人の御世話をするやう」を「社会奉仕」の精神だといい、「そしてむくいをもとめぬやう」を「国家奉仕」の精神だといっています。この三訣は大正14年（1925）の著作『自治三訣　処世の心得』（安國協會出版部）の中に収められています。もう私の煩わしい解説などではなく、後藤本人の語らせてみましょう。「人のおせわにならぬやう」を後藤は次（⑥）のようにバラフレーズしています。

⑥●「身体が無数の細胞からでき上がっているように、社会といい国家といわれる大きな団体も、人間という無数の個人から組織されている。細胞が不健全であれば、その社会国家も勢い不健全な集団であることを免れない。自然、社会国家が健全であるよう希うならば、個人々々が自治精神の堅実な活力に満ちた者でなければならない。この意味から個人として自己を完成して自主独立の人にあらしねばならぬように、社会国家から見ても、この細胞である個人がどこまでも健全であることが必要である」（後藤新平『後藤新平とは何か－自治』藤原書店、平成21年）

ちょっと話が脇道にそれますが、福澤諭吉に『中津留別之書』（明治3年）という本があります。福澤は故郷の中津で家督を継いだのですが、貧しさの耐えかねて家財を売却し、母と姉を故郷に残し、慚愧の思いで中津藩を後にして大阪の緒方洪庵の適塾で学び、その後、東京に出て、どうにか幕臣となった男です。母と姉を東京に呼びもどすために中津に帰ってきた時に、故郷の人々に書き残した書が『中津留別之書』です。その中に次（⑦）のような有名な一文があります。

⑦●一身独立して一家独立し
一家独立して一國独立し
一國独立して天下も独立すべし（福澤諭吉『中津留別之書』）

というものです。そういえばNHKの大河ドラマ「坂の上の雲」の主人公、モックン演じるところの秋山真之が故郷の松山を去る時、「東京の偉い先生が〝一身独立して一国独立す〟といっちょりますわ」と何度も友人に説いていたことを思い起こします。

後藤新平が第一訣にこめた精神は、おそらく福澤のそれと同類のものであったのでありましょう。そしてそれが往時の日本の「時代精神」であったということができるのかもしれません。

第二訣「ひとの御世話をするやう」についてですが、後藤は次（⑧）のようにいっております。

⑧●「人の御世話をするのは、余力が人に及ぶもので、世のため人のための奉仕である。換言すると個人として磨かれた美しい人格は、社会的生活を営むことによって、初めてその真価を発揮することができるのである。自主的自治の個人生活から出る作用であって社会的に自主生活を営むのが文明人の持前である」（後藤新平『後藤新平とは何か－自治』藤原書店、平成21年）

この点は後藤の思想を考える上で特に重要性をもっていると私は考えます。後藤は先に引用しました著作『自治生活の新精神』の冒頭で、次（⑨）のようにさえいっているのです。

⑨●「人間には自治の本能がある。……人間は自己の生活を拡充させる権利を持っている。どのようにして自己の生活を拡充させ向上させるのか。自己は決して自己単独で生存できない。自己の生活はただ隣人とともに団結してはじめて拡充させ向上することが可能である」

つまり後藤は、人間が自主的自治の個人生活から、社会奉仕という公人生活（つまり奉公）に進むのは、人間自治の本能から出る「作用」だといってところが重要だと私には思われます。

私はつねに学生諸君に向かって、特に入学式や卒業式の学長告辞の中で、利己的に生きるばかりではなく利他的に生きることの意義にめざめよ、公の意識にめざめよ、と説いています。

しかし、後藤は社会的奉仕が人間の本能である「自治」精神からおのずと導かれる、といっているのですから、後藤は私などよりは人間に対する信頼感がよほど強い人物であったと想像されるのです。

再び話はそれてしまいますが、東日本大地震の発生からほどなくして、拓殖大学の学生諸君の多くが救援ボランティア活動に励んでおります。国際学部の諸君は震災直後から準備を始め、5月の連休に入ると同時に教員ともども石巻市に出かけました。また龍澤会の学生レスキュー・ボランティア・チームが学生主事とともに釜石市での救援活動に従事しました。以来、石巻と釜石の両市において救援活動に携わった拓大生の数は300人を超えています。この活動は今後ともなお長期にわたってつづけていくにちがいありません。

国際学部のボランティアチームのリーダーである織田潤一君は、震災発生後ただちに石巻に向かったのですが、その時、彼の心を捉えたのは、「自分がいま東北の被災地に行かないと一生後悔することになる」という直感であったと『学報』に記しています。自治と社会奉仕が人間の本能からおのずと湧き出るものだと考えた後藤の思想を、この織田潤一君の行動は示しているように私には思われます。

第三訣が「そしてむくいをもとめぬやう」です。これが後藤の窮極の訣です。「三訣」の訣には極めるという意味があるらしいのです。そうだとしますと、三訣とは、つまり人間がその人生において極めるべき三つの生き方のことではないかと私は考えています。第三訣を後藤は次（⑩）のように記しています。

⑩●「個人としては自主的自治の人、社会に立ては奉仕の精神で働く人、そしてわが社会国民のために力を尽くすのが肝腎であり、これが〝むくいをもとめぬ〟という第三訣である。……自治の精神がなぜ尊いかといえば、要は国家の活力の源泉となるからである。国民各個人が自治の精神を体して働くことは、ちょうど有機体とこれを形成する独立細胞との関係のようになり、国家が活躍するということは、つまり国民各個人が公共の精神を養い、一身の計が立ったならば、進んで社会のため国家のために働き、各自一致協力して国民相互の福利を増すことを図り、国家の機能を活発にすることである。したがって、自治生活は国家の活力の源泉となるのである」（後藤新平『後藤新平とは何か－自治』藤原書店、平成21年）

実はこの後藤の思想が台湾統治の「生物学的植民地論」、さらには満鉄経営における「文装的武備論」として現実の政策となっていくのでありますが、今日はそこまでは入る時間がありません。11月12日（土）に拓殖大学文京キャンパスでシンポジウム「後藤新平とその時代」が開かれます。昨年の「桂太郎とその時代」につづくものです。後藤の台湾統治や満鉄経営の思想につきましては、そのシンポジウムで私の考え方をお話します。また前回に引きつづいて阿部晋三元総理が今回もまたパネリストとしてご出席して下さいます。後藤新平の思想にさらにご関心をおもちの方はどうかそちらの方にご出席をいただければと思います。ご静聴、有り難うございました。